

# 正論



FUJISANKEI  
COMMUNICATIONS  
GROUP  
OPINION  
MAGAZINE

SEIRON  
2017

# 6

## 正論 コロシム 激突スペシャル GW特大号

教育勅語は是か非か 寺脇研vs八木秀次  
危険な「共謀罪」か 小川敏夫vs小川榮太郎  
護憲か、改憲か 柳澤協二vs潮匡人

## 北朝鮮「炎上」、トランプvs金正恩の裏側

香田洋二 / 湯浅博 / 安部南牛 / 荒木和博

藤波辰爾「城外」乱闘



大人の恋は  
色々ある。

これが強制徴用の像だ  
スクープ!  
杉田水脈

Mr.FIGURE

## 新世代改憲論議進化論

宍戸常寿 / 山本龍彦 / 山田賢司 x 北神圭朗 / 別所直哉

日本虚人列伝「立花隆」小浜逸郎

長島昭久 さらば民進党

追悼  
渡部昇一

→コイはコイでも…  
(250ページ)

衆議院議員

長島昭久

緊急寄稿

# さらば、 民進党



平成29年4月10日、16年余お世

話になった民進党（民主党）を離れ、一人の政治家として「独立」を宣言しました。単なる離党ではなく、敢えて独立という表現を使った理由は後段で詳しく述べますが、まず、なぜ「今」離党に踏み切ったかについて述べたいと思います。きっかけは、2年前にさかのぼります。そう、あの荒れた「安

保国会」の時です。

## 安保法制反対の「矛盾」

そもそも私は、外交・安全保障を担うべく政治家を志しました。1990年代後半、留学先のワシントンでは、外交問題評議会（Congressional Relations）の研

究員として、米国の外交・安全保障政策の立案、遂行、検証、提言を行う政策コミュニケーションに身を置きました。お陰で米国のみならず、世界中から集まる外交官、研究者、政治家、メディア関係者との間に貴重なネットワークを築くことができました。そしてアジア中心の国際関係の政策研究に没頭する傍ら、バブル崩壊以後の停滞にあえ

ぐ日本の政治への危機感は日に日に高まっていました。

そんな私に突然転機が訪れました。2000年9月、私が活動する選挙区の前任者がある事件で議員辞職に追い込まれ、国政進出への千載一遇のチャンスが巡ってきたのです。しかし、家族をワシントンに残したまま急ぎよ臨んだ補欠選挙は惨敗でした。そこから3年間の浪人生活を経て、2003年11月の総選挙で初当選させていただきました。

当選後、私は迷うことなく安全

保障委員会を志望し、以来、国会議員としてその活動の大半を外交・安全保障政策に注いできました。

積極的に党内論議に参画し、先輩格の前原誠司さんや松本剛明さんはじめ同志の皆さんと専門家らと交え研究会を重ねて来ました。

ただ、私は民主党のためだけに仕事をしてきたという感覚はなく、常に国家の安全保障や戦略的な外交はいかに在るべきかを追求し、「外交・安全保障に与党も野党もない。在るのは国益のみだ」と公言してはばかりではありません。

しかし、平和安全法制が注目された先の安保国会では、完全に党派性の中に埋没してしまいました。

民主党は共産党など左派系の野党と共闘。「安倍政権の暴走を止めるにはこの道しかない」とばかり

に、政府解釈変更は「立憲主義を逸脱」し、政府提出の安保関連法案を「違憲」と断定しました。「廃案」をめざして一直線に突き進んで行ったのです。

これらの主張は現実離れした極論でした。しかも、本来冷静に熟議を尽くすべき国会議員が、法案に反対する院外の群衆の中に飛び込んでアジる、煽る、叫ぶ……。そこから、現実的な対案を提示する健全野党としての矜持も、多様な意見を吸い上げて国会における安全保障論議を活性化させようというような真摯な姿勢も感じられませんでした。

2015年夏、私は安保法制を採決する衆院本会議場に一人呆然と座っていました。党内論争に敗れた末、党議拘束に従って安保関連法案に反対票を投じたのです。失意のどん底でした。

長島昭久氏 昭和37（1962）年、

横浜市生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程修了（憲法学）。石原伸晃経済再生担当の秘書を経て、平成15年の衆議院選挙で初当選。防衛副大臣、首相補佐官などを歴任した。当選5回。

確かに政府案は肝心要の領域警備法制を欠き、米軍の後方支援を全地球的に可能にするなど危うい要素も含んでいました。不出来な法案ではありませんが、我が国の安全と日米同盟の深化、地域における安全保障環境を安定させるためには欠くべからざる安保法制改革だと考えていた私にとって、この法案に反対することは自己矛盾も甚だしい「暴挙」でした。

本来であれば、この時に造反、離党すべきでした。しかし、同志の皆さんから諫められたり励まされたりで最終的に決断ができず、基本政策や路線の修正に一縷の望みを託して党に踏みとどまることを決めました。

そして、昨夏の代表選挙では出馬を模索。できる限り旗幟を鮮明にしようと、①野党共闘の見直し②憲法改正草案の策定③抵抗路線

に偏した国会対策の転換―を掲げて、同志と共に推薦人集めに奔走しました。しかし、私たちの意見に賛同する方々は少なくなかったものの、推薦人に名を連ねてくださる方は規定の20名に及ばず、あえなく出馬断念に追い込まれたのです。

蓮舫新代表は「保守」と目される野田佳彦前総理を幹事長に起用しました。「すわ野党共闘路線の見直しに踏み切るのか？」と一瞬期待をしましたが、結局、野党共闘は不動の路線とばかりにさらに深化して行きました。そして、ついには「市民連合」なる組織を介在させ、衆院選に向けた政策協定の基になる「基本理念の共有」にまで踏み込んだのです。

そこでは冒頭、「立憲主義の回復」と安保法制の阻止、安倍政権での憲法改正の阻止」がうたわれまし

た。共産党の主張が色濃く反映されたこの基本理念は、残念ながら私の標榜する外交・安全保障のリアリズムと重なることはありません。この訴えが社会保障政策や経済政策よりも上位に求めていることから、市民連合なる組織の主眼は明らかになりました。

しかも、その日の会合のひな壇は、中央に共産党の小池晃さんがいて、その両脇を民進党の野田さんと社民党の又市征治さんが固める構図でした。これには、愕然とさせられました。

**問題は民進党にあり**

私は、ことさら共産党を批判するつもりはありません。個々の議員は優秀で、正義感にあふれ、真剣に議会活動に取り組んでいます。政策の方向性は異なるものの、そ

の質疑内容には常々敬服しておりました。

問題は共産党ではなく、民進党の側にあるのです。目先の「選挙戦術」を重視する余り、「政権奪還のための戦略」を蔑ろにしてしまっているのではないかと、ということでは、政権戦略の核心は政策です。安倍政権を批判するばかりではなく、実現可能な対案を示し、自民党に代わって政権を担い得る可能性を国民にアピールすべきではないでしょうか。要は国民の目に、民進党の主体性が奪われていくように映ることが最大の問題な

のです。

もはやこの党にとどまる意義を見いだすことはできませんでした。優秀な仲間や信頼できる同志を残して党を去ることはまさに断腸の思いでしたが、後援会の皆さまと1年余りにわたり真剣な議論を重ね、最終的には緊急で開いた後援会総会で300人を超える皆さんが私の心情を正面から受け止めてくださいました。これに、ついに決心がつかしました。

さて、冒頭申し上げたように、このたびの私の行動は単なる離党ではなく、一人の政治家としての

独立です。なぜ、独立なのか。私は離党記者会見で、今回の行動の大義について「真の保守をこの国に確立したいという一点にある」と述べました。逆に言えば、民進党に籍を置いたままでは「真の保守の確立」はできないと悟ったのです。

それでは、真の保守とは何でしょうか。私は、我が国の歴史と伝統を貫く「寛容の精神」を体現したものでないかと考えます。真の保守は多様な意見を包摂し統合することができるとは、リベラルの方も普段は多様性を

**武藤記念講座**

大阪：武藤記念ホール  
地下鉄谷町線天満橋下車3番出口3分  
(大阪城方面出口)

五月十三日(土)午後時三十分～三時三十分  
**「憲法改正へどう向き合うか」**

日本国憲法施行70年目を迎えるにあたり、①日本国憲法の異常な成立経緯②世界の憲法との比較のなかで③最大の課題としての憲法第九条④なぜ憲法改正か⑤憲法改正の主な論点⑥昨今の憲法改正の動向⑦求められる国民の英知。以上七つの視点から憲法改正への向き合い方を考えてみたい。

講師 駒澤大学名誉教授 西修氏

**国民會館叢書**

武藤山治の先見性と彼をめぐる群像  
恩師福澤諭吉の偉業を継いで

二〇一七年は、武藤山治生誕150周年にあたり、福澤諭吉が「独立自強」を社会的正義感で、経済人から政治家へ、そして言論人・文化人として、常に見識ある先見性を発揮して我が国の近代化をリードした六十七年の生涯を巡り、山治嫡孫の武藤治太が執筆しております。

A六判 一五頁 六四〇円税込送料別

お申し込みは下記まで

〒540-0008 大阪市中央区大手前2-1-2  
公益社団法人 国民會館  
TEL.06-6941-2433  
FAX.06-6941-2435

大事にされているはずですが、いったん論争になると権力に対するルサンチマンのようなものがふつふつと沸き上がり、違いを認めず、相手を徹底的に論破しようとするあまり、寛容さに欠ける言動がしばしばみられます。政府や保守的な主張に対する攻撃は時に激烈です。市民連合なる組織を率いる政治学者が、一国の総理に向かつて「お前は人間じゃない。叩き斬つてやる！」などと叫んでいるのには唖然とさせられました。

一方、保守の側の劣化も激しく、教育勅語を信奉したり、中国や韓国を口汚く罵つたり、皇統は男系以外認めないと主張していれば「保守」だと言わんばかりの粗雑な言動が散見されます。私は、真の保守というのは、国際社会でも通用するような歴史観や人権感覚を持ち得ねばならないと考えてお

ります。不寛容なりべラルも、粗雑なホシユも、一度立ち止まって国内外の現実を直視し、それぞれの議論を整理し直すべきではないかと率直に思います。

私は、安保国会に先立つこと一年余り前から、党内論議と並行してツイッター上で様々な立場の方々と議論を戦わせておりました。ネットの世界は基本的に匿名ということもあり、皆さん激しい口調で迫ってきますので、時に辟易するような誹謗中傷の類もありましたが、めげずに議論を続けました。

それでも、安保法制の賛否をめぐる左右の対立の激しさ、醜さには衝撃を受けました。議論がかみ合うどころか、単なる罵り合い、傷つけ合いに陥ることもしばしばでした。これをネット世界の出来事と片付けるのは簡単ですが、実

は国会審議でも同じような罵り合い、果ては議員同士の乱闘騒ぎまで委員長席の周辺で繰り広げられました。

### 目指すは「中庸保守」

このまま国家の基本にかかわるような問題とくにこれから憲法改正という戦後政治の根幹にかかわるような究極のテーマが控えています―をめぐり、左右の激突が繰り返され、過激な極論や暴論のぶつかり合いが続くようでは、日本社会における言論空間はますます殺伐としたものとなり、保守とリベラルの分断や亀裂は抜き差しならないところまで行くのではないかと、深刻な危機感を抱いておられます。その恐ろしさは、今日の米国社会の分断状況を見れば想像に難くないと思います。

朝鮮半島情勢が深刻さを増すなか、安保法制を前提に自衛隊を運用し、日米同盟強化を図る政府と、安保法制を完全否定する野党勢力との間で激突が起こるとすれば、国家の主権や安全保障、国民の生命や自由は混乱の淵に追いやられてしまうかもしれません。安全保障というものはやり過ぎて、やらなさ過ぎてはいけません。国際情勢の現実を直視しつつ、「慎慮」をもって判断を下さねばならないのです。これが外交・安全保障のリアリズムというものです。

万が一、朝鮮半島で不測の事態が起これば、自衛隊の運用で挙国一致の取り組みが必要になってくる場面が出てくるはず。しかし、上述のような「対決国会」にあつてはそれぞれの国会議員は党派性を帯び、与党は徹底的に政府を支持し、野党は政府を激しく攻

撃することでしょう。私には、それが国益にかなうとは到底思えないのです。

私は、真の保守を標榜する立場から言論空間における左右と国会における与野党の主張を包摂し、互いの対立点を解消するために粘り強く説得に努めていきたいのです。国益に照らして、互いの主張を調整し、一致点を見出して、挙国一致の体制づくりに少しでも貢献したいと願っています。

それは「足して二で割る」といった単純な話ではなく、むしろ、「中庸の思想」に通ずるものがあります。中庸とは、過剰に対する自制と、不正に対する毅然とした姿勢によって、一方に偏ることなく、常に調和を重んずる思想だと教えられました。中庸を保つためには、強い意志と高い理想を持たなくてはなりません。

私は、これまで心血を注いできた外交・安全保障分野を中心に、今後、国会の内外で、与野党や左右の対立を超えた「中庸」の政策や戦略を練り上げるために、志を同じくする皆さんと共に行動していこうと考えております。そのために、私は、特定の党派から独立する決断をしたのです。

さしあたり、超党派の勉強会を立ち上げ、朝鮮半島有事を想定した対応について、現実的かつ穏当な政策提言を政府に対して行いたいと考えております。そして、中長期的には、外交・安全保障のみならず、我が国を取り巻く内外の諸課題と真摯に向き合い、あるべき政治のかたちをつくり上げるために、「中庸を旨とした真の保守政治の確立」という大義の実現を目指していく決意です。